The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	故松山直藏君を憶ふ
Author(s)	堀, 維孝
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 18-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

今川女史と彼女とは若し怠らなければ東西相對して女流漢學者になるであらうと話した、今私が之を書くのは單に女史一人の爲めではない、博士の薫陶を受けた同堂の研究者は何卒遺志を奉して熱心に勉學して、博士に報謝せられんことを望むからであります。（昭和二年九月上旬記す）

故松山直藏君を憶ふ

堀　維　孝

明治三十五年廣島高等師範が創設せられて、北條校長始め教官事務員合せて七八名が文部省内の一室で創立事務を執つて居た七月の或日、圖漢書買入の爲某書店に校長の御伴をした事がある。其時校長は半紙を竪折にして横に奇麗な細楷で漢籍の名を記してある幾葉かの紙を示され、是れは授業開始迄に廣島に來任すべき漢文教官の提出したものだと告げられたが、誰といふことは御尋しなかつた。

八月半頃廣島に移つて間も無く其人も來任せられた。それが松山君であつた。爾來予が大正五年學習院に轉任する迄約十五年間、公には同一學部に勤務して關係の密接な學科を分擔し、始終教官室を共にし、幾回か講習を共にし、私には時々の訪問往來の外、或は他の同志と共に書物を會讀し、或は

佛典の聽講に膝を併べ、山寺の參籠を共にし、又或夏は共に朝顔の培養を樂しんだ事などもあつた。其間君は腹部の重患に永く惱まれた事があつたが、予が轉任の頃は健康で居られた。其翌年鹿兒島に行つた歸途廣島に立寄つて二泊し、國漢學部の教官學生や西深田岡部其他の諸氏とは會合したが松山君と逢つた記憶が無い。或は其頃既に大阪に移られたのであつたか。

大正十三年の末予は健康も不十分に且つそろ〳〵老境に入つたので學習院を退いた。其翌年の春頃と思ふ、松山君が予が麻布の宅に來訪せられた。偶々二階の書齋に居た予は友の遠來に驚喜して階段を駈降りて玄關に迎へた。君は先づ驚いて『君はソンナにして居るのか』と云ふ。『ナゼ』。『イヤ君が中風で半身不隨になつて居ると聞いて出京の序に見舞に來たのだ。』『それは有りがたう。さういふ譯ではない』と笑話しつゝ二階に請じた。松山君は『君が中風といふ事は大阪では甲氏に聞き東京でも乙氏に聞いて來たのに、案外だ。歷史の信ずべからざること皆こんなものだらう』とか云つて快笑された。俤今も眼前に在る。粗飯を共にし緩話して去られた。相會はざる十年に近い年月も、君の面貌には更に跡を殘さない程若々しく健康に見えられた。さう云つて羨祝の意を述べると『まだ數年は大丈夫らしい』と云つて笑はれてあつたが、その『數年』にならない今日、予は追懷の筆を執つて居るのである、先年朝顔を樂しんだ仲間は幾人かあつたが、其中予が最も繁く相往來觀賞したのは君と西君とであつた。偶々西君から昨日來た手紙の中に『朝顔此夏は美事に咲出で表庭の方には鉢植茶の間の前には垣

作致し朝な〳〵眺め候』とある。此處鎌倉郊外の陋居、机前數歩の庭にも、蒔いた儘の朝顔が毎朝昔ながらの種々の花をつけてゐる。

松山君は實直眞面目な人であつた。君を想ふ毎に溫然たる風手と落着いた音聲とが耳目のあたりを去來する。けれども何か書かうと思ふと是れと云つて特別の事柄が浮んで來ない。所謂逸話的といつた樣な言行は君には餘り多くなかつた樣だ。然し此稿は君と關係の無い或は薄い人に面白い話を聞いて貰はうとするのではないから、只思出る儘に二三の事を認める。

○いつ頃であつたか君が其舊藩主某子爵の令息を預かつて監督敎導して居られた事があつた。委しい事は知らないが予が見聞に入つたはし〳〵からでも君の忠實親初な心情の伺はれる事が多かつた。予が學習院に轉任後、偶々其弟の人が擔任學級に居て、偶然の事で君の噂を聞いた。君東上する毎に必ず舊主家を訪問され、時には宿泊された事もあり、同家の厚い信賴を受けて居られるとの事であつた。

○予は君や西君などと共に夏冬の休暇の一部を佛通寺に過した事が一度ならずある。山の中の寺で冬は中々寒い。朝目覺めても床を離れるに勇氣を要する樣な日がよくあつた。予々の起臥してゐた室から湯殿の方に行くには長い廊下を通るのであるが、時には緣板の上に雪か霜かが凍てついて居て足裏が刺される樣に覺ゆる事もあつた。君はいつも薄暗いうちに起きて湯殿の前の竹緣で丸裸になつて

水を浴びられた。其水は山の上から樋を傳て水槽に溜つて居るので半ば氷つて居るのである。少し後れて洗面所に行くと、君の浴び散らした水が竹綠一面に氷つて居て甚困らされた事が屢々であつた。

○これも佛通寺での事、君が獨參を濟ませて室に歸るや否や片隅の小机に向つて冊子に何か書かれる事が折々あつた。其時君の顏を見た者は誰でも、抑へきれぬ喜悅が漲つて居るのを見たであらう。何を書かれたかは全く知らない。

○君が重患に罹られて福岡病院で手術を受けられた時は其經過に就いて皆隨分心配したのであつた。退院出勤されて後或日國語漢文學會で祝賀會を開いた。君は挨拶の中に、自分の重き病の治癒した幸福を演べ、寛大親切な取扱をされた校長に謝し、又君の病氣中に兇及に斃れた外務省某局長の事に言ひ及ぼし（或は君と某氏とは兼て知合であつたのかも知れぬ）、彼の如き有爲な人物で彼の如き不慮の災難に遭ふ人もあるのに自分は何たる仕合かとの意を述へられて、感激の涙に聲を曇らされた時は列座の者皆言知れぬ虔肅の情に打たれた事であつた。

○始めて君や西君と共に培養を試みた朝顏の種子は當時東京に居た予が父に送つて貰つたのであつた。多くの種類があつた中に珍らしい變り物の出た種子には『何々出』と附記してあつた。すべて其種類の混ぜぬやうに注意して蒔き、生えた苗を分配した。其後ポツ〳〵咲き出した頃、君が風鈴附瓔珞咲が咲いたから見に來いと話されたので、それは珍らしいと直ぐに行つて見ると、平凡な尋常の五枚

切が一鉢床の間に安置されてあつて、麗々しく其變り咲の名札が立てられてあつた。君は『出』の字を漠然と解せられたらしい。相語つて笑ひ興じた事であつた。

○君は自ら信じて疑はないといふ氣質には餘程富んで居られた。狐疑怯懦の子の如き、君に對して內心赧然たる事が尠なくなかつた。尤も君の此氣質は仕事や考究の上に取つては寧ろ短所となつた場合も無くはなかつたかも知れぬ。然も畢竟ずる所究極の眞は誰にわかるか。自ら確信して漫に動かないのは男子の大なる美德であらう。

○君は柔道に錬達して居られて廣島高師の柔道部の主任を長く勤められ、其發展に貢獻された事甚多かつた又國語漢文學會の主事としても大に働かれた。同學部の主幹であつた藤村君が東大に去られて、不肖其後任を命せられてゐた間は、學部の事に就いて特に君の翼助を仰いだ事も多い。又長い間には意見の一致しない事も時折あつた。それもこれも今は思出の種である。然し公務に關しての事は書かない。

（昭和二、八、二六記）